ロンドンにおける都市自然の保全と環境 NPO の活動

The Conservation of Urban Nature and Role of Voluntary Bodies in London, England

橋詰直道*

Naomichi HASHIZUME

摘要：本研究は、ロンドンにおける都市自然（緑地）の分布構造と、その緑地の保全活動を支えている環境 NPO の活動内容及び活動空間の特徴を比較分析したものである。研究の結果、次のような点が明らかになった。①ロンドンの自然的緑地率は、周辺区が都心区の3倍強と高い。②ロンドンでは、環境 NPO 団体である BTCV London と LWT による緑地保全のための維持管理活動が活発であるが、両者は目的や行動理念が異なるものの、その活動にはその支部組織の有無などと関係して地域差がある。③両者の活動地域は空間的に偏在しており、必ずしも自然的緑地率の高い周辺区に活動が卓越する訳ではない。

1. はじめに

わが国でも近年、里山の保全や都市地域でのビオトープの整備などが注目を集めている。とくに、都市とその周辺地域に残されてきた薪炭林などの緑地の維持管理や湿原や河川などの自然生態系の復元なども行なわれるようになった。いうまでもなく、こうした緑地保全活動を実務レベルで支えているのは、市民ボランティア活動による非営利団体（以下環境 NPO）である。

関東地方におけるこうした環境 NPO の現状は、栗田・植竹¹⁾の研究によって明らかにされてきた。しかし、環境 NPO 活動の先進国である英国におけるグラウンドワーク事業の紹介や、環境 NPO の実務紹介例はあるが、実証的研究は重松²⁾ 石川³⁾らを除き多くない。重松²⁾は、British Trust for Conservation Volunteers (BTCV) の活動の場合、1980 年代以降田園地域ばかりでなく都市地域で実践される総量が多くなっていると指摘しているが、これまでに都市地域における BTCV の活動を具体的に分析した研究例は見当たらない。また、ロンドンを始めとする都市自然（広義の緑地）の保全政策に関する実証研究としては、Good e^{4),5)}、Box and Harrison⁶⁾、橋詰⁷⁾などがあげられるものの、ロンドンの環境 NPO 活動を取りあげた研究例は多くない。その意味では、ロンドンにおける緑地保全と環境 NPO 活動の実態を分析することは、わが国における都市地域の緑地保全や里山の維持管理の今後のあり方を考える上で参考になることが多いと思われる。

本研究は、この視点に立って、ロンドンにおける都市自然（緑地）の分布構造と、その緑地の保全活動を支えている代表的な2つの環境 NPO の活動内容及び活動空間の特徴を比較分析することを目的とした。分析対象とした環境 NPO は、ロンドンで最も活発な緑地保全活動を展開している BTCV London と London Wildlife Trust (LWT) である。なお、ここで扱った都市自然とは、いわゆる公園緑地空間ではなく、樹林地・草地・荒地・水辺地・墓地・鉄道廃線跡地など、市街地とその郊外に残された野生生物の生息空間としての緑地を指す。

2. 資料と分析方法

本研究の対象地域は、都市自然の保全が重要な課題となっている大ロンドン（City of London を含む 33 区、以下ロンドン）とした。

本研究では、区別の都市自然から成る緑地構造を明らかにするために、「ロンドン計画諮問委員会 London Planning Advisory Committee（以下 LPAC）」の 1994 年の資料⁸⁾を用いて自然的緑地率（グリーンベルトと大都市緑地（Metropolitan Open Land 以下 MOL）の合計指定面積比）を算出した。ここで自然的緑地としたのは、グリーンベルトには多くの農地・牧草地や森林が、MOL には自然の緑地のほか公園やスポーツ広場などが含まれることが多いためである。

環境 NPO の活動については、BTCV London と LWT 両団体本部事務局での聞き取り調査結果と BTCV の会報⁹⁾、LWT の会報¹⁰⁾ および LWT の資料¹¹⁾に掲載されている緑地保全活動とそのサイトに関するデータを用いた。

研究の分析手順は次のとおりである。まず、ロンドンの自然的緑地率を算出して区別比較することで、緑地空間の地域の特徴を明らかにした。ついで、BTCV London と LWT の両環境 NPO における近年の緑地保全活動の内容及び活動サイトの地域の特徴、およびその活動と自然的緑地構造との関係について比較検討した。とくに、BTCV London と LWT の緑地保全活動が、都心に比べて自然的緑地の多く残されている周辺の同一地域において共に卓越するか否か、また両環境 NPO の緑地保全活動にはどのような要素が関係しているのか、という点について、区別のデータに基づく相関分析を行った。このことで、これまで言及されてこなかった環境 NPO の活動空間の特徴について考察した。

3. ロンドンの自然的緑地構造

ロンドンにおける都市自然と環境 NPO の活動の関係を分析するためには、まずロンドンの緑地構造の空間的特徴を把握しておく必要がある。そこで、LPAC の緑地に関する資料⁸⁾を用いて、区別の自然的緑地率と1人あたりの自然的緑地面積を算出し、図-1 とそれに対応する図-2 を作成した。

ロンドンにおけるグリーンベルトの合計面積は 34,526ha で、このうち、都心区（区 No.1~14）が 158ha、周辺区（区 No.15~33）が 34,368ha であった。MOL の合計面積は 14,621ha（都心区 3,455ha、周辺区 11,166ha）であった。この2つの合計面積比である自然的緑地率は、都心区が 11.4%、周辺区が 36.2%で、グリーンベルトに指定されている緑地が多い周辺区においてその値が都心区の 3.2 倍を示していることが判明した。自然的

*駒澤大学文学部地理学科

自然的緑地率: Green Belt+Metropolitan Open Landの面積率
 区の番号は図-2に対応する。
 (LPAC(1995): State of the Environment Report for London より作成)

図-1 ロンドンにおける自然的緑地率と1人あたりの自然的緑地面積 (1994)

自然的緑地率: Green Belt+ Metropolitan Open Landの面積率(%)
 (図中の番号は図-1, 4, 6の区名に対応する。基データは図-1に同じ)

図-2 ロンドンの区別の自然的緑地率 (1994)

緑地率が50%以上と高い値を示したのは、いずれも周辺区に位置するRichmond区(58.6%)、Bromley区(56.5%)、Harvering区(51.0%)であった。都心区では、Westminster区が19.4%で最も高い値を示した。図-2からもわかるように、自然的緑地率が25%以上の13区は、すべてロンドンの外縁部に位置しており、都市化の進行とグリーンベルトの指定面積の大きさが関係していることがわかる。

逆に、自然的緑地率が低い区は、都心区ではIslington区(0.9%)、Lambeth区(4.1%)、周辺区ではBrent区(8.6%)、Barking&Dagenham区(18.8%)などであった(City of Londonは0%)。周辺区でも都心区に隣接した区では、市街地化が進んでいることなどから自然的緑地率は比較的低くなっている。

一人あたりの自然的緑地面積を算出すると、都心区が15.5㎡、周辺区が112.4㎡と、周辺区が都心区の7.3倍となっている。都心区ではWandsworth区が27.4㎡、周辺区ではBromley区が303.0㎡とそれぞれ最も多く、都心区のIslington区で0.9㎡、周

辺区のBrent区で16.7㎡と最も少ないが、その差はかなり大きい。ロンドンの場合、区によって多少のばらつきはあるものの都心区の人口は平均約18万人、周辺区は平均約21万人と、20万人前後であることから、自然的緑地率の高さと1人あたり自然的緑地面積がほぼ対応関係を示すことになる。

以上のように、ロンドンを都心区と周辺区に分けてみた場合、自然的緑地率は周辺区において都心区の3倍強、1人あたりの自然的緑地面積も周辺区が7倍強と圧倒的に高いことがわかった。

4. 環境NPOによる緑地保全活動

本研究では、ロンドンの自然環境の保全に積極的に取り組んでいるチャリティ団体として、現場での実践的な緑地保全活動を行っているBTCV Londonと、最も活発な自然保護活動を展開している自然保護団体LWTの2つの環境NPOを取りあげた。ここでは、両団体の組織の概要、緑地保全活動の内容および活動地域と活動サイトの特徴について分析した。

(1) BTCV Londonの活動

(a) 組織の概要

BTCVは、イギリスで4番目に大きな環境NPOで、1959年に自然環境を保全するボランティアを供給するために設立された

活動: Midweek & Sunday Projects, 活動合計 = 927回
 (BTCV London: Area Programmes (Greenwork) より作成)

図-3 BTCV Londonの緑地保全活動 (1996-99)

図-4 BTCV Londonによる緑地保全活動実績とローカルグループ数の区別比較

団体である。ここで取りあげた BTCV London（以下 BTCV）は、その母体となった組織である。

2000年2月現在、ロンドン事務所に登録されているボランティア数は、約1140人（ロンドン居住者が約90%）で、146のローカルグループがBTCVに加入している。1990年には、地域に密着した活動を展開するためにNewham区に地域支部を設立した。現在、地域支部数は8か所を数える。BTCVは、1999年にロンドンおよびその周辺の215サイトにおいて、年間延べ10,000日以上の緑地保全活動を実施している実践型の環境NPOである。

（b）活動内容

1996-99年の4年間に、ボランティアによる日帰りの緑地保全活動が合計980回（日）行われた。ただし、この中にはロンドンに隣接するEssex州のAveley Marshでの活動が53回含まれるので、今回分析対象としたのはロンドンでの活動927回である。

まず、活動の内容について分析した。活動内容は、実質的な仕事としては2つ以上の活動項目が重複する場合が多いが、ここでは便宜上1つの内容に代表させた。最も多かった活動は、フットパス整備で20.3%であった。ついで、森林管理が18.4%、（うち薪炭林伐採9.8%が含まれる）、雑草や外来種除去が14.7%、池の管理と復元が11.9%などの順であった（図-3）。

これらの活動を季節的に見ると、フットパス整備は、おもに春から夏（4-9月）に、森林管理はおもに秋から冬（10-3月）に行われているが、雑草や外来種除去あるいは、池の管理と復元などの活動にはあまり季節性は認められなかった。筆者が、1999年8月10日（水）に参加したKings George's Fields（Barnet区）での活動では、かつての農地境界の生垣内に侵入し藪を形成しているBramble（セイヨウヤブイチゴ）の伐採と、枯死した生垣樹木Hawthorn（サンザシ）の除去などが行われたし、同年9月5日（日）と10月3日（日）のArrandene Open Space（Barnet区）での活動では、やはりBramble（セイヨウヤブイチゴ）の除去と池の復元が行われた。これら緑地保全活動の目的

は、第一義的には緑地の自然環境の復元・創出であるが、同時にレクリエーション空間としてのフットパス整備なども行われる。

（c）活動地域

BTCVの緑地保全活動は、ロンドン33区中、City of LondonとGreenwich区を除く、31区の合計148地点で実施されていた。ここでは、BTCVの活動回数を区別に集計し、図-4を作成した。

最も活動回数が多かったのは、都心区に位置するTower Hamlets区で125回であった。ついで周辺区のBarnet区で106回（ただしBarnet区では、2000年度以降、自然保護関連予算の削減や区の自然保護専門官が交代したことなどでBTCVとの関係が途切れている。）、Hillingdon区で104回、Ealing区で89回、Camden区で69回などの順で、都心区、周辺区ともに活動が卓越する区がみられた。こうした緑地保全活動が卓越する区では、Camden区のような一部例外を除き、必ずしもBTCVに加入するローカルグループの数が多くとはいえない。これは、BTCVのローカルグループが、BTCVの管理下ではなく、個々に独立した活動を展開しているためであろう。

次に、その活動サイト数を見ると、とくにBarnet区の16か所、Waltham Forest区の14か所、Tower Hamlets区とHillingdon区の12か所、Haringey区の10か所などが多い。また、最も活動数が多かったサイトは、Hampstead Heath（Camden区）で44回、ついで、Old Park Woods（Hillingdon

表-1 BTCV Londonの緑地保全活動回数上位6地点（1996-99）

活動回数	緑地名	区
44	Hampstead Heath	Camden
39	Old Park Woods	Hillingdon
37	Horsenden Hill	Ealing
36	Manor House	Barnet
32	Holland Park	Kensington & Chelsea
31	Tower Hamlets Cemetery Park	Tower Hamlets

BTCV Londonの総活動回数=927回

(BTCV: London Area Programme (Greenwork) 1996-99より作成)

区), Horsenden Hill (Ealing 区), Manor House (Barnet 区) などの順であった(表-1)。

これらの緑地空間の維持管理を BTCV に委託している依頼主は、多くの場合地方自治体(区)であるが、特定の所有者(法人)との保全活動の契約例として、Hampstead Heath の地主である Corporation of London や Manor House の所有者である English Heritage などあげることができる。そのほか、Tower Hamlets 区では、地元の公益法人である Jones Environmental や Environment Trust からの管理委託を受けている。また、Tower Hamlets, Croydon, Haringey, Richmond 区など BTCV 支部組織が存在する区においても緑地保全活動は活発である。

このように BTCV の緑地保全活動は、必ずしも自然的緑地率の高い周辺区に多いとはいえず、特定の区あるいは特定の団体との契約関係、または BTCV 支部組織の存在などがその活動数やサイト数を左右していることがわかった。

(2) London Wildlife Trust (LWT) の活動

(a) 組織の概要

LWT は、英国内 46 の Wildlife Trust の中の 1 団体で、ロンドンの野生生物の保護を目的に 1981 年に設立された環境 NPO である。2000 年 2 月現在、約 7200 人の会員を擁する LWT は、残された緑地の自然回復や生物の多様性を重視した緑地保全と維持管理計画を各区に提案すると同時に、City of London を除く 32 区の支部組織を通じて、市民ボランティアによる緑地保全活動、環境教育活動や自然保護運動にも積極的に行動している啓蒙型の環境 NPO である。

LWT の緑地保全活動の特徴は、56 か所の都市自然として貴重な緑地の維持管理に関わっていることである。この中には、地方自然保護区 Local Nature Reserves (LNRs) が 15 か所、特別学術保護区 Sites of Special Scientific Interest (SSSIs) が 3 か所含まれている。LWT が、直接この緑地の保全活動を行なうこともあるが、自治体を通じて地域の環境 NPO (BTCV を含む) に活動を依頼する場合もある。

図-5 London Wildlife Trust の活動 (1998-99)

(b) 活動内容

LWT が 1998-99 年度に行った合計 1265 回の活動(月例活動を含む)を図-5として集約した。その結果、緑地保全活動が 535 回(42.3%)と最も多く、ついで自然散策会(24.3%)、家族や子供のための諸イベント(16.4%)などの順であった。なお、野生生物観察会では野鳥、野生植物、蝶・蛾、さらにコウモリ観察会も催されている。こうした活動は、恒常的に行なわれる月例活動の形で行なわれる場合も多い。緑地保全活動は、地域の環境 NPO との合同イベントとして行なわれることもあるため、ここでは活動の詳細には言及しない。

LWT は、緑地保全活動という実践面では BTCV ほどの機動力は持ち合わせていないことはいうまでもない。自然保護のための生態専門スタッフを擁する LWT では、BTCV のような実践活動よりも、自ら維持管理する緑地サイトでの緑地保全活動や支部

組織を通じた環境教育活動や自然保護運動に積極的である。

たとえば、LWT が Barnet 区から維持管理を委託されている緑地の 1 つである Rowley Green Common (土地は区有地)で毎年 6 月に開催される自然観察会 Open Day などは前者の例である。1999 年は 6 月 27 日に開催されたが、LWT の Barnet 支部会員はかに、このサイトを共同管理している地元の BTCV に加入するローカルグループである Barnet Conservation Volunteers などのメンバーが案内役となっていた。また、この支部の主催で、同年 10 月 30 日には、同区内の区有地のオープン・スペース Long Lane Pasture で、住宅建設に反対する住民集会とデモ行進が行なわれたが、これは後者の例である。このように、LWT の活動は、非常に多岐にわたっており、時には圧力団体としての役割をも担っている。

(c) 活動地域

LWT が維持管理する LNRs などの緑地は、ロンドン西郊に位置する Hillingdon 区に最も多い。ここでは The Yeading Valley など 9 か所、合計 116.7ha の緑地が緑地保全活動の対象となっている。Barnet 区では、Rowley Green Common など合計 4 か所(20.2ha)が、都心区の Southwark でも、その緑地規模は小さいが合計 4 か所(11.1ha)で、維持管理計画に基づく緑地保全活動が行われている。もちろん、LWT による緑地保全活動は LNRs や SSSIs などに指定された緑地ばかりではない(表-2)。

表-2 LWT が維持管理する緑地サイト数の上位 4 区 (1999)

区	緑地数	代表的緑地(LNRs指定地)	面積ha
Hillingdon	9	The Yeading Valley, Gutteridge Wood	25.0
Southwark	4	Sydenham Hill Wood & Cox's Walk	9.0
Barnet	4	Rowley Green Common	5.7
Croydon	4	Bramley Bank	10.4

総緑地LNRsサイト数=55か所、LNRs: Local Nature Reserves (LWT: Wild about Town, 1999より作成)

LWT の活動回数を区別に集計した図-6を見ると、BTCV と同様、LWT の緑地保全活動も、区によってその活動回数に大きな差が認められる。最も活動数が多かったのは Camden 区で 127 回、ついで Southwark 区の 65 回、Brent 区の 54 回などとなっているが、その多くが月例活動によるものである。全緑地保全活動の約 60% が月例活動によるが、Camden 区では 91%、Brent 区では 89%、Southwark 区では 74% と月例活動の割合は高い。これは、特定の緑地において年間維持管理計画などに基づくきめ細かな活動が実施されているためである。

LWT の場合も、BTCV のそれと同じく、必ずしも自然的緑地率が相対的に高い周辺区に活動が卓越する訳ではなく、都心区においても活発な活動サイトが存在する。例えば、都心区に位置する Southwark 区には、LWT 本部と自前の植物苗圃園 Centre for Wildlife Gardening があり、Camden 区にも、自ら管理する自然生態園 Camley Street Natural Park が位置している。いずれの活動サイトも LWT 専属スタッフが常駐するために活動が活発であると考えられる。周辺区では、同じく専属スタッフの常駐

表-3 LWT のスタッフが常駐する緑地サイト (1999)

区	緑地サイト名	規模(ha)	職員数	備考
Camden	Camley Street Natural Park	0.9	3	LNR
Southwark	Sydenham Hill Station	1.9	1	LNR
Southwark	Centre for Wildlife Gardening	0.2	2	
Barking & Dagenham	The Chase	48.0	2	
Barking & Dagenham	The Ripple	10.0	1	
Hounslow	Crane Park Island	1.7	1	LNR
Hounslow	Gunnerybury Triangle	2.6	1*	LNR

職員数は常駐職員、*は非常勤職員、LNR: Local Nature Reserve (LWT: Wild about Town, 1999より作成)

かったが、LWT 緑地管理サイト数と自然的緑地率の間には、ある程度の相関関係が見られた。このことは、自然的緑地が多く残されている周辺区に LWT の管理サイトが比較的多く、その緑地保全活動は LWT よりむしろ、BTCV が担っていることを物語っている。

以下に、定量的指標では説明が困難な両環境 NPO の活動地域の違いについて検討を加えた。

BTCV と LWT は、その団体の目的や行動理念が根本的に異なっているが、緑地保全活動の契約に関しては、両者ともに自治体（区）との関係は深い。しかし、両者の活動地域が一致しないのは、それぞれ異なる自治体と関係を保っていることや、地域で独自に活動している環境 NPO との連携の有無などが影響しているものと考えられる。

BTCV との関係が希薄な区として、Brent, Greenwich, Hounslow, Southwark 区などをあげることができるが、これらは LWT の活動が比較的活発な地域である。とくに、Southwark 区は LWT の中心的活動地域であると同時に、Trust of Ecology など地元団体が個別の活動を展開しているため、BTCV との関係が疎縁になっていると見ることができる。Greenwich 区には王室関連の団体が、また、Greenwich, Leisham, Hackney 区などではグランドワークのグループが活動していることも、BTCV の活動回数を少なくしている理由の 1 つと考えられる。

以上のように、ロンドンを代表する BTCV と LWT という 2 大環境 NPO は、その目的や行動理念が異なるが、既に多くの自然が失われた都心区でも緑地保全活動を展開しており、こうした

活動には、支部組織の存在や自治体および地元団体との関係の有無などが大きく影響していると考えられる。

6. まとめ

本研究で明らかになった事実は、以下のように要約できる。

①ロンドンを都心区と周辺区に分けてみた場合、自然的緑地率および 1 人あたりの自然的緑地面積は周辺区において圧倒的に高い。②BTCV は市民ボランティアにより緑地保全活動に専念する実践型の環境 NPO で、その活動は自治体または特定の団体との関係、あるいは支部組織の存在などによって大きな地域差がある。③LWT は、自ら維持管理する緑地を中心に緑地保全活動を展開するだけでなく、環境教育活動、自然保護運動にも積極的に行動する啓蒙型の環境 NPO で、活動地域は BTCV の場合と一致しないものの、特定の都心区でも活動が活発である。④区別にみた BTCV と LWT の活動回数の間には全く相関関係は認められず、両者の緑地保全の活動地域が空間的に偏在しており、自然的緑地率の高い周辺区において活動が卓越するものではないことなどが明らかになった。

謝辞：本研究は 1999 年 4 月から 2000 年 3 月までの 1 年間、駒澤大学在外研究を利用して行なった研究成果の一部である。研究を進めるにあたり、ロンドン大学（University College London）地理学科の Carolyn Harrison 教授には終始ご指導を頂いた。また、調査に際して BTCV London および LWT 職員の方の協力を得た。ここにお礼を申し上げます。

補注・文献

- 1) 栗田和弥・植竹薫 (1999)：関東地方における市民による環境 NPO の自然環境保全活動に関する研究：ランドスケープ研究 62(4), 400-404
- 2) 重松敏則 (1992)：英国 BTCV の田園景観及び森林生物環境の保全活動について：造園雑誌 55(5), 325-330
- 3) 石川誠 (2000)：ボランティア組織の農村環境保全への取り組み - イギリス・ニューベリーの事例から：農村計画学会誌 19(1), 72-77
- 4) Goode, D. (1989): Urban nature conservation in Britain: Journal of Applied Ecology, 26, 859-873
- 5) Goode, D. (1999): Habitat survey and evaluation for nature conservation in London. Reumer, J. and Epe, M. ed. Biotope Mapping in the Urban Environment - DEINSEA 5. pp.27-40
- 6) Box, J. and Harrison, C. (1993): Natural spaces in urban places: Town & Country Planning, 62(9), 231-235
- 7) 橋詰直道 (2001)：ロンドン・バーネット区における緑地保全と維持管理に関する資料：駒澤地理 No.37, 65-78
- 8) London Planning Advisory Committee (1995): State of the Environment Report for London: LPAC
- 9) BTCV の活動に関する資料は、季刊誌 Greenwork (1996 年冬号から 1999 年秋号までの 16 冊) に掲載されている
- 10) LWT の活動に関する資料は、会報 Going Wild in London (1998 年冬・春号から 1999 年秋・冬号までの 6 冊) に掲載されている緑地保全活動を含むすべてのイベント（月例活動と特別活動）の活動実績によった。調査した 2 年間の総イベント数は 1265 回で、うち緑地保全活動は 535 回であった。
- 11) London Wildlife Trust (1999): Wild about Town, A Guide to the Nature Reserves of the London Wildlife Trust: LWT, 51pp

Summary : The purpose of this study is to clarify situation of conservation for urban nature and the role of voluntary bodies (conservation NPO) in Greater London. The results obtained from this study are summarized as follows. The ratio of urban nature area in Outer London was three or more times higher than that of Inner London. The British Trust for Conservation Volunteers London (BTCV) and the London Wildlife Trust (WLT) has a significant role to play in the nature conservation movement in London. Both BTCV and LWT have deeply relations to the local councils. But there is a difference in the method of approaching the nature conservation activity BTCV and LWT. Main conservation activities sites by the London Borough are unevenly distributed and also the main activity area of BTCV and LWT is not corresponding. These activities sites are distributed not only over the Outer London but also over the Inner London where green spaces have already been lost.